

漱石探訪プログラム

1日目 - 4日(日)

漱石5番目の下宿の真向かいに位置する漱石記念館で、漱石が過ごしたピクトリア朝末のロンドンの様子と漱石の軌跡について講義を受けた際には、当時のロンドン塔、タワーブリッジやピカデリーサーカスの人混みの写真パネル、そして国勢調査に残された漱石の筆跡の写し等々、貴重で莫大な資料に圧倒された。漱石が暮らしたロンドンの下町クラバム・コモンを散策すると、歴史を感じさせる赤い郵便ポスト、落ち着いた英国庭園に出逢い、ここで暮らした著名人のパネルに実用電話を発明したグラハム・ベル(1847~1922)らと共に漱石が「こころ」「坊ちゃん」「吾輩は猫である」を書いた最も有名な日本人作家として掲示されていたことに驚いた。

午後からは、漱石が訪れ入館記録の自署が残るカーライル博物館と大英博物館を訪問した。歴史家・評論家カーライル(1795~1881)は、self-help(自助)、

dynamism(劇的な変化)等々500以上の現在も

広く使用される言葉を創り出したことで有名である。博物館はチェルシー地区の静かな住宅街にあり、中庭では馴れたコマドリが出迎え、気さくな館のスタッフの方々に親切、丁寧に説明、帰りは川縁の公園のカーライルの銅像のところまでお見送りしていただいた。



ロンドン漱石記念館内での恒松先生の講義風景

2日目 - 5日(月)

ツアー中、唯一雨模様となった朝はロンドン塔とタワーブリッジを見学、これも「霧のロンドン」を体験でき幸運だったと言える。その後、車でケンブリッジ大学街を訪れた。(片道1時間半程の所要時間)運河が流れる石畳の街並みは、写真で見ると中世ヨーロッパが目前に広がり、大学の



タワーブリッジを背景に

建物は教室というより宮殿そのものであった。キャンパスの池では水鳥がたわむれ、荘厳な雰囲気の中、ステンドグラスやパイプオルガンが今も目に焼き付いている。多くの若い中国からの観光客が目立った。彼らは、ケンブリッジのキング・カレッジへ留学し、不幸にも飛行機事故で亡くなった詩人徐志摩(1897~1931)を顕彰、石碑で記念撮影する姿に、母国文化を大切に思う気持ちは、何処でも変わりがないと感じた。

3日目 - 6日(火)

午前中、ダリッジ美術館を訪問した。1902年2月1日、漱石が訪問した際の署名が来館者名簿に鮮明に残っていた。漱石が「文学論」で触れたサラ・シドンス夫人の肖像

画が展示されている。恒松ロンドン漱石記念館長が同美術館に毎日通い詰め2004年に発見し、漱石の軌跡を知る大きな手がかりとなった。

午後は、本ツアーならではの「印象」に描かれた情景を徒歩で散策した。漱石が聴講生となったロンドン大学のユニバーシティ・カレッジ・ロンドンでは、当日卒業式が行われており、キャンパス内に入ることができた。アカデミックガウンに身を包んだ多くの学生と1860年代に日本から留学した先駆者を称える日本語で書かれた記念碑を見ることができたことは幸運でした。



漱石の自署が残るダリッジ美術館

金銭的情况から大学への入学より、できるだけ多くの書籍を購入し読書することを選んだ漱石が通ったであろう古本屋街を訪れた。漱石が普段歩いたチャリングクロス、トラファルガー広場などを散策しながら、レンガ造りの集合住宅と近代建築が織りなす中世からの歴史と近未来が調和したロンドンの街並を肌で感じる事ができた。

4日目 - 7日(水)

7日(水)は、大学生参加者は、フェアトレード大学に認定されるシティ・ユニバーシティ・ロンドンを訪問し、直接学生同士の交流を行った。未来に向け持続可能な都市をめざし、学生が主体的に、大学教員、大学生協スタッフを巻き込んだ参加型の取り組みは、先駆的で今後の日本での大学生ボランティア活動の推進や益々必要となる青年期教育に対し多くの示唆を含んでいる。(他の参加者はウィンザー城観光)夜は、英国の貴族、著名人、政治家など上級階級のステータス・社交場である紳士クラブで振り返り交流会を行った。漱石がロンドンで学ばなかった階層社会である。(当事業団では、11月19日(土)に開催するセミナー「海外という視点で考える漱石」で、恒松ロンドン漱石記念館長に「漱石がロンドンで見たこと、学ばなかったこと」をテーマに基調講演いただく予定。

漱石とロンドン

今回のツアーをとおして、熊本から旅立ち、漱石が二年ニヶ月を過ごしたロンドンを肌で感じる事ができた。「文学論」で、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快な二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり」と書いているが、別な活発、精力的に活動した漱石を垣間見ることができた。一方、大柄な英国人、多様な英語の発音、そして金銭面等々多くの苦労があった。恒松ロンドン漱石記念館長が著書「漱石 個人主義へ -ロンドンでの“つぶやき”と“つながり”-」に書かれているように、漱石が「利己主義やエゴイズムとは明らかに異なる他の存在を尊重すると同時に、自分の存在も尊重する」考えを学び、その後日本の学生に伝えていく、人生の中で、かけがえのない時であったと思う。そして、漱石の個人主義は、今のグローバル化が進展する社会で最も重要な考え方であろう。